

第201回 番組審議会

1. 日 時 平成23年4月12日 (火) 12:00～
2. 場 所 ホテルメトロポリタン盛岡 ニューウイング 3階「星雲」
3. 委 員 委員総数 12名
出席委員数 8名 (欠席委員数 4名)

○ 出席委員 (敬称略)

中村 慶久 (委員長)

—以下50音順—

久慈 浩介

斎藤 純

斎藤 雅博

藤原 保雄

村上 幸子

八木橋 伸之

吉田 浩次

○ 会社側出席者 (6名)

佐藤 滋樹 (代表取締役社長)

小原 忍 (専務取締役)

藤澤 利憲 (常務取締役)

前田 秀男 (取締役編成技術局長)

藤原 銀司 (取締役営業局長)

薄衣 明 (報道局長)

○ 事務局 村田 重昭

4. 議 題 「東日本大震災に関するテレビ報道について」

5. 議 事 概 要

今回は3月12日に発生した「東日本大震災に関するテレビ報道について」審議しました。出席した委員からは「被災者の目線に立った報道で良かった」、「ラジオでは分からない映像の力を実感した」、「不眠不休の取材と番組作りに敬意を表したい」など番組を評価する意見がありました。

また一方で「停電でテレビを見ることができなかった」、「公共広告機構のコマーシャルが多過ぎるのが気になった」、「繰り返し悲惨な映像を見せることへの配慮がほしかった」、「これからは希望のもてる番組を制作してほしい」などの意見がありました。

6. 議事

○事務局

それでは、ただいまより第201回番組審議会を開催致します。

本日ご欠席の委員は、三浦副委員長、東海林委員、菅原委員、役重委員です。

東海林委員と三浦委員はお仕事の都合でご欠席です。菅原委員は先日の余震で建物の梁に亀裂が入ってしまい、急遽ご欠席とのことでした。役重委員も余震の被害に対応するため、役所に泊まり込みで対応にあたられているそうです。

本日は、議事に入る前に、社長の佐藤より震災以降のめんこいテレビについてお話させていただきます。

○佐藤社長

まず3月11日に発生いたしました「東日本大震災」について私からご報告させていただきます。今回の大震災は県内だけでも死者が3,800人を越え、行方不明も4,000人余りと未曾有の大災害となりました。

まずは社員の安否についてですが、当社社員、そして家族につきましては全員の無事が確認されています。(親戚や知人まで広げると、犠牲になった方もいます)

局舎については大きな被害はありませんでしたが、報道の駐在員がいる大船渡支局の

1階は津波の被害を受けていて支局を移転しました。

中継局関連では、デジタル中継局 60 局のうち、陸前高田市にあるミニサテ局が津波により流出いたしました。が、応急処置をしております。

放送に関しては発生時より、FNN報道特別番組として 24 時間体制で放送を続けました。その後、キー局がゴールデンタイムを通常番組に戻した後も、めんこいテレビでは 4 時間や 3 時間のローカル特番を組み被災者情報を発信し続けました。開局以来、例のない規模での対応となりました。

報道にあたってはフジテレビを先頭に FNN 系列各局、南は鹿児島、北は北海道まで、中継車及び取材クルーなどの応援をもらい、応援だけで当初は連日 60 人以上の体制となりました。ガソリンや軽油の燃料についても系列局から支援してもらいました。

今現在も、系列からおよそ 30 人に応援をもらいながら報道を続けております。今回の大震災で、改めてテレビの役割や使命が浮き彫りになりました。復興するまでどの位の時間がかかるのか見当もつきませんが、めんこいテレビとしては被災者の皆さんの側に立った報道を、そして、少しでも岩手を元気にするような活動を展開していきたいと考えています。

○事務局

ありがとうございました。

今回の議題は、3月11日に起きました「東日本大震災に関するテレビ報道について」です。めんこいテレビの報道番組を中心にご意見を賜ります。本日は報道局長の薄衣が出席しております。

○事務局 それでは、中村委員長よろしく願いいたします。

○中村委員長

議事に入る前に、このたびの大震災で被災された方々に心からお見舞いを申し上げますとともに、亡くなられた方々のご冥福をお祈りしたいと思います。それでは議事に入ります。前田さんと薄衣さんから、説明をお願いします。

○前田取締役編成技術局長

私からは、編成的な部分についてお話をさせていただきます。めんこいテレビは、地元のメ

ディアの責務として災害に関する報道をするというのが当たり前ですが、法律的にも放送法第6条の災害のあった場合の放送という規定があります。今回のような大きな災害が発生した場合には、国民の生命と財産を守るという観点から、その影響をなるべく軽減するような放送をしなければならないという規定で、我々めんこいテレビとしては、そういった意味でも最大限の放送体制を取ったという事になります。

簡単に経緯をご説明致します。地震が発生したのは14時46分でした。その5分後、14時51分にめんこいテレビのスタジオからカットイン（通常やっている番組を中断して緊急の報道体制に入った）しました。それ以降、FNN系列をあげて報道特番という形で緊急報道、災害情報番組としてこれまでにない規模で放送しております。震災の起きた11日より13日の日曜日までCMを一切なしで終日放送をしました。週が明けて14日の月曜日からは少しずつ被災県以外のエリアでは通常番組に戻りましたが、めんこいテレビでは引き続きCMに関しては17日までは公共広告機構、「AC」と言いますが、そちらの方に全て差し替えて放送しました。

その後、めんこいテレビでは報道部が中心になりまして、災害情報番組を制作、放送しました。15日深夜から22日の深夜帯、通常ですと番組の終了した後の放送休止時間ですが、その時間を使って避難者名簿や安否情報を放送しました。

その後現在も続いています。めんこいテレビでは、通常とは異なる編成で放送をしています。まずは夕方のニュース番組は通常は18時からですが、1時間前拡大をしてニュースを放送しました。また、大枠のローカル特別番組をはじめ4月10日までに、43本の報道番組を制作、放送しました。さらに土曜日の正午からの番組「あなろぐ」は3月で終了し、4月からリニューアルして「はちきゅん」というタイトルの新番組をスタートさせる予定でしたが、こういう状況でしたので、「はちきゅん」も4月一杯は、震災情報を盛り込んで放送しています。

それとは別に、我々はL（エル）字告知と言っていますが、通常の番組の外側に流れるロールスーパーに生活情報を随時送出しております。

以上がめんこいテレビでこれまでやって来た、あるいは現在も進行中の災害報道番組の状況であります。

○薄衣報道局長

昨日で1ヶ月を迎えた東日本大震災ですけれども、岩手県内だけでも死者、行方不明者合

わせて9,000名近い未曾有の災害となってしまいました。その災害に対して当社の報道部がどのように取り組んできたかを、簡単にご説明させていただきます。

まず、報道部の体制をご説明します。報道部は私と部長以下、デスク2名、アナ兼記者が8名、記者3名、カメラ、編集FD、タイムキーパー、スーパー担当など合わせて約30名の体制でやっております。その人数で通常は昼のニュース、夕方のニュース、夜の8時55分からのショートニュースをローカルニュースで差し替える形で報道しております。

このような未曾有の大災害ですので、私どもの力だけでは災害報道を継続することはできません。地震発生直後、まず、秋田テレビのSNG車、これはF-SATという衛星を使って中継に用いる車ですが、これがいち早く駆けつけてくれて11日の夜8時頃に宮古に到着しました。続いて新潟総合テレビのSNG車が高速を走れない中、夜通し一般道で駆けつけてくれ、12日の昼頃に陸前高田に到着。この辺りからいろんな情報を被災地から飛ばせるようになりました。その後、ぞくぞくとFNN系列の応援の取材団が岩手に入りました。例えば3月14日、3日後の体制ですが、FNNの体制としては、宮古に秋田テレビのSNG車とENGのクルーで5名、山田町には関西テレビのポータリンク班（持ち運びできる中継機材を言います）その班で5名。フジテレビのソウル支局から4名。フジテレビの他のクルーで3名、釜石には関西テレビの別のSNG車とENG合わせて15名のクルー、大船渡には当社のSNG車とENGを合わせて8名、陸前高田には新潟総合テレビのSNG車の3名と北海道文化放送の2名、フジテレビの北京支局の方が5名、県北の普代・野田村には鹿児島テレビからの応援が5名ということで、外部だけで55名の応援体制になりました。その後、本社にもキャッチャーという素材受け担当の方と、デスク2名が入っていただいて総勢60名近い体制で現在まで取り組んできました。今日現在もSNG車が当社を含めて2台。ENG応援クルーが5クルーとポータリンク1台。計30名近い体制が続いております。

発生直後の本社の状態はどうかといいますと、まず11日14時46分に地震が発生したわけですが、県内全域が停電となってしまいました。そのため局舎にある自家発電に切り替わり、放送を続けましたが、燃料の重油が満タンならば3日もちますが、この時点では残り48時間しかもたないという状況でした。翌12日の16時過ぎには本社近辺で電気は復旧したわけですが、その間被災者を含めた岩手県民は全域停電だったために、ワンセグでしかテレビを見られない状況でした。岩手の被災状況を全国に知ってもらうために、そうした意識をもって精一杯情報発信に出来る限り努力してまいりました。どのような震災情報を発信してきたかといいますと、フジテレビ系列は地震発生から61時間ぶつ通しで生番組を続けてまいりまし

た。当社としては、その中で何度も何度もカットインを繰り返して岩手の被災情報を全国に発信し続けました。翌14日の週になってフジテレビはレギュラー編成に戻りますが、内容は情報番組がずっと続きましたので、結局14日の24時10分まで震災関連の番組が続きました。ここで数時間、放送休止となりましたが、翌朝も朝早くからずっと情報番組が続きました。

フジテレビは15日21時からレギュラーのドラマに戻る予定だったのですが、被災地の岩手ではドラマはいかがなものかという事で、急遽、協議の結果、今、県民が一番ほしい情報は何かという観点から、被災地に家族や親せきがいる方々のために安否確認の意味を込めて、被災者の名簿を紹介してはどうかということになり、その日21時から4時間に渡って被災者の名簿を紹介する番組を急遽特番で組みました。この番組を原型に、この週は深夜・早朝・デイトムで合計9枠の特番を組みました。さらに17日木曜日には19時から3時間、18日金曜日には4時間という大枠で、ドキュメントを含めた特番を組みました。翌19日土曜日にも2時間の特別番組を放送しております。このような短時間でこれだけ長尺の特番を放送できるという事は今後2度とない事だと思い、報道部員一丸となって取り組みました。

翌21日の週になると、この週からは通常のスーパーニュースの枠に加えて、17時からのスーパーニュース前拡大を取りました。通常ローカルニュースは18時17分からですが、この週は16時から1時間に渡って震災のその後の情報と、被災者に向けた生活情報を、1週間月曜日から金曜日まで続けました。翌28日の週からは、改篇によってローカルニュースは18時15分からと2分早まりましたが、そこから番組終了までネットに戻らず、ローカルニュースを放送しました。

4月10日には震災から1ヶ月ということで13時から2時間の特番を組みました。番組では発生から1ヶ月を振り返るとともに、これからの復興にむけたヒントになるのではないかという内容を放送致しました。ゲストとして、阪神大震災をずっと追いかけて取材され、スマトラ沖の地震、津波でも取材に行かれた、関西テレビの橋本副部長と、都市作りや地域防災を研究している岩手大学 工学部 社会工学科の南正昭教授をお迎えして、詳しくお話しいただきました。

以上、発生から今までに、めんこいテレビ報道部が取り組んできた災害報道や特別番組について、簡単ではありますが説明させていただきました。

○中村委員長

大震災というか、こういうことが起こらない、起こることを予想もしなかった事が起きたということがあって、各局とも報道の方々の努力によって、ずっと生で連続して流していただいたと思います。その中で、めんこいテレビさんも大変ご苦労されたということが分かりました。

それでは委員の皆様からご意見、ご感想を伺っていきたいと思います。

藤原委員からお願いします。

○藤原委員

めんこいテレビというか、フジテレビというか、そればかり見ている訳ではなくて、あちこち見ているものですから、どれがめんこいテレビの報道だったのか判然としないのですが、私も被災現場に行ったり、県の災害対策本部を取材したりしていますので、めんこいテレビの皆さんも非常に精力的に頑張っているのを目の当たりにしています。敬意を表したいと思います。

番組について言いますと、たぶんどこの局も同じだと思いますが、大枠としては災害対策本部を始めとする当局の動き、それから現場の声・様子、生活情報。大体、大別するとこの3つで構成されているかと思います。めんこいテレビにおいても、それぞれの要素をきめ細かく、先ほどおっしゃられた被災者の目線に立った報道をされていると思います。

波板観光ホテルに秋田県の人が40数人宿泊していて、そこで津波被害に遭って、波板観光ホテルさんの懸命な努力によって救われたということがありました。これはのちに秋田県知事が達増知事を表敬訪問した時に感謝していた出来事ですが、その様子を克明に報道されていたのが印象深く残っています。きわめて良い企画で、着眼点もいいし取材も丹念に出来ていたと思います。

余震が続いているし、原発は放射能を出し続けているし、これからもいろいろな事があると思います。引き続きこれまで通りの報道をしていただければ視聴者も助かると思います。

ひとつ感じたのは、災害報道などで過熱取材というのがこれまで報道機関の中で問題になって議論してきていますが、私が知り得る範囲では非常に抑制が効いています。住民とのトラブルは、まだ私は聞いていません。

いつも感心するのはアナウンサーやリポーターの方が淡々と説明されますよね、感情を表に出さずに。あれは非常にいいなあと思います。相当な教育を受けていると感じています。番組中に突然大きな余震が起きても慌てず騒がず、是非あのような抑制の効いた調子でやっ

ていただければ、非常に安心して見る事ができますので、引き続きあのような態度で報道していただきたいと思います。

我々、産経新聞も基地局は私一人ですし、現場には社会部の連中が入っていますが、めんこいテレビも限られた人数で本当に大変だと思います。長丁場ですのでどうか健康に留意して、適当に休んでやって下さい。

○中村委員長

斎藤純委員をお願いします。

○斎藤純委員

本当にお疲れさまです。御社に限らず報道の人たちは本当に大変で良くやると思っ、地震が起きてから数日過ごしていました。

盛岡全域は停電だったものですから、テレビが見られるようになったのは翌日の夕方からでした。それまではずっとラジオを聴いて、どうも大槌が壊滅したらしいとか、陸前高田は町が無くなっているとかという話しを、アナウンサーからの声として聞くのですが、壊滅というのが分からなかった。床上浸水を全部してしまったのか位の感じでした。まさか根こそぎ建物が無くなっているとは思ってもみない。そこでテレビがついたとたんに、あの光景を見せられて、まず唾然としました。津波の恐ろしさについて僕は吉村昭の三陸津波も読んでいますし、それから中学の時に僕らの学校は学習旅行というのを嫌々やらされて、私が担当したのは宮古の磯鶏辺りの津波の経験者の話しを聞くというものでした。当時はまだ経験者が生きていました。分かっているつもりだったけど、全然本当は分かっていたという事が今回の震災で、特にテレビの映像を見て思いました。

テレビ局の映像だけではなくて、一般の人が映像を撮っていて、すぐさま放送局に届いて全国に放送されるというのは、新しいスタイルの報道というか、三陸津波はあまりにも古すぎて伝承でしか伝わっていなかったのですが、これからは映像として残るわけで、そういう意味でも全く新しい形の災害を経験したと思っています。

ひとつお願いですが、阪神淡路大震災の時は半年で国中の熱が冷めたそうです。今回は、被害規模においてもはるかにそれを上回るものですから、是非、風化させないようにするのもこれからの報道の務めだと思います。たぶん被災地の復興は10年位かかることでしょうから、まだまだお金も全然足りません。そういう所がこれからの報道に求められていく事

だと思っています。

それからもうひとつは、後で久慈委員からお話があると思いますが、自粛ブームをやめさせることを、めんこいテレビが発信してそれを全国に流してほしいと思います。そんな事は被災地は求めているという事を、石原都知事の耳にも届くように是非大々的にやってほしいと思います。

○中村委員長

八木橋委員をお願いします。

○八木橋委員

震災の当日、実は会議で東京に行っていました。都庁の35階で会議をやっていましたが、会議が終わってエレベーターで降りて、甲州街道に向かって歩きだしてタクシーを拾おうと思った瞬間にグラグラと来ました。3日間、東京に缶詰になりました。あれが若干遅れていたら、35階でエレベーターが止まりますから、歩いて降りるしかなかったという状況でした。

テレビ映像の凄さをその時実感しました。タクシーを拾ってホテルに着いてすぐ地震速報が入って、一番初めが宮古の魚市場で車がどんどん流れている映像が入って来ました。今ラジオの話しも出ましたが、2度目の余震の時は停電になってテレビを見る事ができませんでした。グラグラと来て、宮古の魚市場で車が流されているのを何時間後にはテレビでやる。あの凄さは改めて実感しました。この前の余震の時に停電でラジオしか聞けない心細さとは違って、東京ではもの凄いリアリティーがあって、映像でしか見られない凄さをもろに感じました。テレビ報道の威力をあらためて実感させられました。

初動は大変良かったと思います。震災当日、翌日もそうでしたが、夜になって暗い所しか映らないのですが、石巻の火事をテレビで夜中のうちに中継していました。あれは凄かったです。翌日の夜が明けてからの映像も読売は読売なりに、朝日は朝日なりにと各局違います。チャンネルを変えることで、局ごとにどこで中継しているのかが分かり、今この局は石巻に入っているとか、非常に実態というか、各社の違いが出ました。そのため震災の様子が非常に良く分かったという意味で、初動は良かったという気がしています。

先ほどの説明で、他局からの応援もあったという事ですけど、交通が途絶えた時によくあそこまで行ったなという気がします。そういう意味でテレビが頑張って放送することは非常にいい事だと思います。

ひとつ気になったのは、各局とも最初は人命救助と物流の問題をあげてやっていました。先ほど話しがありましたが、放送法の問題もありますが、確かにチェックといいますが、起きている問題を、そのつどそのつど批判も含めて報道していかないといけないのではないかと思います。行政としては、後でまとめてチェックして、最後になってまた何とか委員会を立ち上げて、皆さんの意見を次の事に生かすことになるのでしょうかけれど、やはり被災県の特権といいますが、なぜ物流が遅れたのか、なぜ油が届かなかったのか、そういうことを被災者の側からもっと言ってもいいのではないかと思います。私も東京から帰って来る時に、新潟、秋田経由で帰ってきました。被災県への貨車を編成するまでに何日もかかっている。あんなバカなことがあるかとか、仙台空港は一時は閉鎖を考えたけど、物流の拠点を作るために、実際には米軍が来てやってくれた。そのつどそのつど、チラッとでもいいから批判しておかないと、人間だから後になると忘れてしまう。行政の委員会になってしまうと、必ずお手盛りになってしまって何が何だか分からなくなってしまいます。神戸は地震しかなかったもので、もちろん神戸とは違います。今回は津波ですが、津波に遭った後の対策がほぼゼロではなかったのか？当初、人命救助、次は物流で、それがもっと早く出来たはずなのに何で遅かったのかという事を、チラッ、チラッと批判していかないといけないのではないのでしょうか？放送法とか電波法による電波有限原則なので、新聞とは違うという説はありますが、被災の時は言ってもいいのではないのでしょうか。こういう所が悪いとか、ここは直せとかチクチクとやっていかないと、後になると忘れてしまう気がします。震災だから人命救助とか物流回復に一致協力しようというのは分かります。協力はするけど、この点は問題があるというのであれば問題があると、そのつど提言していった方が本当はいいのではないかと思います。批判抑制を求めるトーンがありますが、NHKを始めとしてああいうトーンがいいのかどうか。そのつどそのつど言っていないと、後になると忘れるのではないかという気がします。

ある局で解説者が「物資の配分が上手くいかないのは、行政機構がうまくいっていない」と言う解説者がいました。役場とか市役所が無くなっている時に何を言っているのか、しかも震災から数日経った時に、そういう解説をした解説者がいたんですよね。腹が立ってきて「何を言っているんだ」と思いました。そういうのは、そのつどそのつどチェックしていくべきだと思います。物資が届かない、何が来ないとか、ガソリンスタンドどうのこうのというのは、原因が何かという事をそのつどチェックして提言していかないとはいけません。短いコメントでもいいですから、それが積み重なっていくと、後になって思い出した時に役に立

つのではないかと非常にそういう気がしました。おそらく被災者の特権だと思うので、そういう事はどんどん言った方がいい。それは放送法や電波法に違反しないだろうと思います。

今回は政府でも初動は非常に良く、神戸の時とは違って、すぐに高速道を止めました。その後、車輛運送規則というのがあって、ダンプカーを一旦禁止してしまうと走るのにダンプ許可がいります。個別に現地に物を置いて来てまた戻ってきて、また許可を取ってなどというバカな事をしていて、縦割り行政の弊害です。自衛隊の出動なども3県の県知事が要請して素早く対応したのはいいのですが、災害対策基本法と自衛隊が入って来るのとは法律が違います。調整機関がない。だから自衛隊の所に物が集って来ても行政との連絡でうまく分けることができないとか、そういうのは時々チェックを入れておかないといけません。ハッキリ言えば地震後の対策はあったけれども、日頃の津波後の対策はゼロだったと思います。そういうことを日頃、少しずつチェックしていかないと、後で復興して気持ちが休まった時に「さあ思い出して、何とか言いましょ」と言ってもかなり混乱してしまっているから、その辺はそのつどそのつど、声高に批判する事はないけれども、ちょっとチェックを入れる事が必要だと思います。

そういう意味で、震災報道としては非常に良く出来ていました。地元の被災者を紹介する番組は、昔NHKの「尋ね人」という時間がありましたが、あれを思い出しました。被災者は大勢いますが、ひとつの枠ですと数人しか出せませんよね。あれなんかもまとめて紹介する方法はないのか？合理的な方法も考えてもらえれば良かったと思います。

○中村委員長

斎藤雅博委員お願いします。

○斎藤雅博委員

実は当日、私は釜石に行っておりまして、お昼ごろまで釜石の大町という所にいました。津波が2時間・3時間早く来たら、私は完全に巻き込まれていたという状況でした。2時46分には中妻方面におりまして、車で移動中に地震に会いました。まず、車の中では携帯でワセグが見られました。車のラジオも聞いていました。やはりテレビの方がすぐに津波の情報とか地図もすぐ見られたので、テレビに強みがあったと思いました。先ほど初動の話していろいろと話しが出たんですが、結局テレビ局の災害対応といっても、危機管理的なところがうまく機能したのではないかと思います。そういった意味では非常に評価すべき点ではな

かったかと思います。各局、放送法の趣旨にのっとってやっているのだと思います。今回のように長時間の災害報道というのは初めてのケースだと思います。そういった意味で報道の重要性というのを改めて認識させられたと感じています。

携帯でワンセグを見ていましたが、もちろん充電という問題がありますから、あまりワンセグを見たという人は少なく、停電していてもテレビを見られるということが、あまり知られていなかったのではないかと思います。職場の連中もあまりテレビを見ていなかったのですが、私は車の中でずっと充電しながら見ていました。情報を目で見られる、テレビの情報量は圧倒的ですので、使い方の問題なのですが広めても良かったと思います。

最初の1週間ぐらいは、津波のショッキングなシーンを繰り返し流していました。一時期から子どもへの影響を考えて控えたのでしょう。そういうことは必要です。だんだん心の問題になると思います。そういったところは放送局としてもメディアとしても考えなければならぬ点だったかなと思います。

個別に見ていて気が付いた点として、生活情報のところは、めんこいテレビは比較的に見やすい形でやってくれたと思います。大久保アナウンサーが出ていて、パネルなどを利用して単にスーパーで見せるよりも非常に分かり易かったという風に感じました。ただ避難所に行くと被災者にいろいろと質問している点については、岩手朝日テレビが紙に書いていて、名前とかメッセージとかは、はっきり言って見ていて分かり易かったです。誰が言っているのか、誰に言いたいのか？めんこいテレビはマイクだけだったので、聞き逃してしまうと分からなくなります。できればそういった形の方が訴えやすいと思います。

放送局全体に言えるかと思いますが、最初は震災の情報が圧倒的に多かったのですが、途中から原発が変わって、そういう意味ではローカル枠できちんと地元の震災情報を流してくれたのは非常に良かったと思います。

今後のこととしては、復興という部分を是非追いかけていただきたいと思います。復興については、都市計画がどうなるかと考えると、5年とか10年かかるだろうと思います。やはり希望をもてるような番組も是非作っていただきたい。長い間追っていただければ、20年後か30年後か分かりませんが、過去の番組としてドキュメンタリー的に作ると非常にいい作品ができると思います。

今回の行政の対応を見ていますと、危機管理が出来ていなかったと感じました。住基台帳のバックアップを取っていなかった、取っていても身近なところだったとか。我々もBCP（ビジネス コンティニュー プラン）と言って、事業を継続する計画を作らせられるので

すが、そういったところが行政に欠けていたのではないかと思います。その辺に、ぜひ切り込んで問題提起をしていただきたいと思いますと思いました。

○中村委員長

久慈委員お願いします。

○久慈委員

(私が)「自粛やめろ王子」のようになっていますが(笑)あの件は自粛をやめることが目的ではありませんでした。東北の物を飲んだり食べたりすることが支援につながるということを、ツイッターでつぶやいたら大賛成をいただきました。その中から映像にして自分の言葉でしゃべってくれとなりました。テレビ局の人がいるのに申し訳ないけど、ユーチューブに出させてもらったら大反響がありました。あれはたまたま僕が言ったというだけで、皆思っている事だと思うので、けっして僕が良いとか凄いというのではなく、皆が思っている事をたまたまあのタイミングで僕がしゃべった。それが岩手の「あさ開」さん、「月の輪」さんと私の「南部美人」の3社、3蔵で発信したというという事が、成果として大きかったという事です。方々からさまざまな取材をされまして、最初は誹謗的なクレームもありました。報道番組に出てクレームを受けたのは今回が初めてです。かなり心が折れましたけれど、その何万倍もの応援のメッセージが寄せられました。「あなたの言っていることは間違っていない」という事を寄せられました。だから報道のされ方というのは、非常に微妙だと痛感しました。でも、誰かがやらなくてはいけないし、誰かが言わなくてはならない。復興に向けて足を前に歩んでいるところを誰かが見せなくてはいけない。そのために誰かが間に立てば、必ず雨や風が当たります。それは覚悟をもってそれを受けとめるだけの覚悟をもって出しました。願いとしては東北の物を東北以外の方々にまずは一品だけでも、一杯だけでも、という事です。無理に「ここで花見をしろとか、大船渡で飲んで歩け」という事ではありません。今は真意を伝えるために出来ることなら電話でも何でもいいから僕にしゃべらせて下さいと。映像だけ見ると「花見をしろ」と捉えられ、それだけだという誤解を生みますから、しゃべらせて下さいという事で、なるべく私の言葉で説明する時間をいただくようにしています。こういう特別な時というのは、ケアをテレビ局の皆さんがしてくれます。特にフジテレビさんの、朝の“めざましテレビ”では「必ず本人の言葉でしゃべっていただきたい」という事で、きちっとした対応をしてくれたので一番良かった。私の中では凄く伝わったという事で

す。その辺も皆さんにぜひ考えていただければと思います。

復興への力強い足並みを、悲しみも共感しながら、見せていくことが大事だと思っています。私は八木沢商店さんの息子さんのコメントが今でも心に残っていて、「親父ではスピードが間に合わないから、俺に社長を代われ」と言って代わったと。本当かどうかは別にしても本当に凄いなと思いました。ああいう風な事を、胸を張って言える事に決意を感じました。最初から決まっていた社長交代かもしれないし、本当にそうかもしれないけれども、希望のもてる報道はするべきだと思っています。それには本人の口からしゃべらせるというのが一番いいと思いますので、ぜひ、その辺も含めてお願いしたいと思っています。

テロップなどは非常に分かりやすいのでずっと続けて欲しいし、斎藤純委員が言った通り風化させないで下さい、必ず忘れられますから。それを忘れさせないように、必ず岩手の僕たちは、沿岸だけが被災者ではなく僕たちも被災者なので、それを僕は忘れないで子ども、孫に伝えていけるようにしっかりと残していただきたいというのが願いでもあります。

まさに、震災時における報道の役割を問われた今世紀最大の報道の出番だったと思いますし、やはり助かりました。情報があるというのは本当に助かります。ありがとうございました。

○中村委員長

村上委員お願いします。

○村上委員

今、久慈委員がおっしゃいましたが、ツイッターとかフェイスブックとか、今はソーシャルネットワークというものが今回もいろいろな広がりを見せたそうで、その波及効果はすごいものがあると思いますが、やはり別な面でテレビの公共性が非常に際立ったと思います。停電が解除になって電灯が点いて、次はテレビをつけたはずです。そこにまた日常が戻ってきたような明るさとテレビの画面の動く映像。これが日常生活の一番大きなシンボルだと私も思いました。うちも2晩目の7時くらいに解除になりました。隣のマンションの電気が点いた！うちも点くかもしれない。点いた！次はテレビですね。衝撃の映像が何度も何度も繰り返し出てくるのですけれど、圧倒的な映像のリアリティーが、どうしてもなく迫ってきます。あとはテレビから聞こえる音です。そこで初めて事の深刻さというものに触れることができ、それから始まるいろいろな事は非常に鮮烈に刻み込まれました。たぶん子ど

もたちも皆そうだろうと思います。

災害報道というのは初動、瞬時に行かなくてはならないというスピード、敏速性と正確さとかいろいろなものが瞬時に求められる過酷な瞬間だったと思います。それを毎日繰り返していたと思います。まず、行って見ないとわからない。取材に行っても、そこで皆さん最初に見た時に呆然、愕然としたでしょう。カメラマンも記者の方も最初はどちらがいいのか、たぶんそういった思いがあったのだと思います。そこから我に帰って何をどう伝えたらいいのか。本当に葛藤がたくさんあったのだらうと思います。その中で他の系列局やキー局からたくさんの応援が来てリポートをされていました。地元の知っているアナウンサーとか、顔が出てくるとやはりホッとします。坂口アナ、高橋裕二アナとか、工藤淳之介アナとか、あちこちに散らばって一生懸命やっている。地元局の役割はそういうところが大きいと思います。そこをひとつずつ千葉絢子さんがコントロールしていました。地元の我々のテレビ局が取材に行き発信しているという安心感というのが、何ものにも変えられないものがあると思います。

スピードもそうですけど、1 ヶ月経ってみて、これからは毎日毎日何が一番重要なのかということが変わってくると思います。このタイミングで何を？その見極めも迷うし、難しいところだと思います。そこをたぶん皆さん「一番何を知りたいですか、何がほしいですか」と聞くんですが、それをそのまま一時的に流すこともすごく大事だと思いますし、さらに生ではなく整理して発信してあげることも必要ではないでしょうか。避難所のレポートを見て知り合いや親戚の安否を確認された方がたくさんいらっしゃる。私の周りにもいます。私も叔父の姿を確認しました。話しているわけではなくてもチラッとでも見ると皆「いた、いた！」と言う。それはテレビの力だと思います。

私どもの“マ・シェリ”も創刊以来初めて、いろんな事情で4週間休みました。やはりその間待っていてくださる方の声もありますし、情報を今まで追われっぱなしで作ってきたところがあるのですが、この約1 ヶ月、大切な情報とは何か？独りよがりに出しっぱなしになっていなかったのか？そういった事を考えさせられる時間だったという気がします。

今回は映像と音声というテレビの持ち味が生かされる大事な機会だったと思います。初心、原点に帰ると何が必要なのか。新聞、雑誌、いろいろな外国のメディアとか、いろんな取材の方法があります。いる立場によって全然、視点が違ってきます。外国のメディアは外国のメディアの目で見ます。その中で地元、これが他県の大震災だったら私たちはどのように撮るのか。そんな事も考えさせられたこの一ヶ月だったのではないかと思います。これからめ

んこいテレビもそうですが、「元気を出そう、ひとつになろう！」いろんなメッセージを各局、新聞もそうですが、そうしたスローガン、メッセージを含めていくという事は凄い事だと思います。普段だったら言えないような事もメッセージ、スローガンに乗せて発信している。ACのCMにはいろいろな意見や感想があるようですが、メッセージが日に日に多くなってくると受け取る側としては励まされたり、これから何を目指して行ったらいいのか。そういうヒントになるような気がします。でも、本当に大変な一ヶ月だった気がします。

○中村委員長

吉田委員をお願いします。

○吉田委員

地震が発生して約1週間ぐらいだったでしょうか、私の記憶ですとその頃にはめんこいテレビの特番が組まれたのが印象に残っておりました。その中でどんな所が一番印象的かといえますと、今も鮮明に残っているのは、高橋裕二アナウンサーの悲しみを必死になって堪えてやっている姿、痛ましい姿というのがありありと感じられました。確かに高橋アナウンサーの場合には前日の卒業式とか、身近の自分の知っている方のご不幸とか、いろんな事が込み上げてそうなったのだと思います。確かにアナウンサーという立場からしますと、淡々と乱れたところは見せないようにするというのが当然ですけど、現地に直接足を踏み入れて自らが肌で感じ取った本当の思い、気持ちを表わすその表現、しぐさ、悲しみの状態、表情、こういうのが本当のテレビの良さですよ。アナウンサーといえども人間ですから、そういう人間味の出ているところが大変良かったと思います。だからそれは大事にさせていただきたいとつくづく感じました。

それから今日は是非触れたいと思っていることがひとつあります。それは私だけかもしれませんが、ちょうど震災が起きて4日目、5日目、1週間その辺りですか。本当にテレビに釘付けになってそれぞれの被災地の、何しろそこに行っていないわけですから、どんな状況だろうと本当に釘付けになって画面を見ていた時に。これは不謹慎かもしれませんが、実に不快な思いを何度も何度もしたと。それはなぜかといいますと。これは何もめんこいテレビという事ではありません。あのACのCMというのは、あまりにも露出度が多過ぎて一体何なのかと。こんな時にオシム元監督の脳溢血の事とか、仁科さんの子宮頸がんの事が度重なるように出ました。率直に思いましたのが、何であんな回数流さなくてはいけないのか、も

っと工夫はできないのかということです。もし、あの場面で言えば、私ども視聴者の立場からすると、亡くなった方々への例えばお悔やみなり、テロップでそういう事を流すとか。あるいは影響力のある瀬戸内寂聴さんのような方がたくさんいますよね、社会的に影響力のある方のメッセージを本当にわかりやすく表現で画面に流す場をもつ。そのような工夫があってもいいのではないかとつくづく思いました。その時に次の日だったでしょうか、外部の会合で頭に来て不快でしようがないと言ったら、異口同音、全員がそう思っていました。みんな思っていたのですよ。そういうように思った方が一杯いたと思います。だから今だに思っているのは、公共広告機構とかという、それはそれで分かります。頻度の問題だとか、出し方に工夫があってもいいのではないかと、ということをお願いしたい。BPOという放送倫理機構があります。今だからこそ、あのような機構がもっとあるべき姿として「ああしろ、こうしろ」という役割を發揮するべき時だと思いました。何も感じないのかと苛立ちさえ感じました。

今回、震災の報道ということで改めて考えさせられたのは、テレビの情報の社会的な影響力が非常に大きい事をつくづく感じました。私は震災ということに関して、もっともっとクローズアップして取り上げて欲しかったなと思ったのは、裏方で全身全霊で活動なさっている例えば自衛隊、警察の方、消防署の方々です。そういう方々の必死になって救援活動にあたっている姿をもう少しクローズアップして皆さんに伝える義務があると思います。意外とそのような事が当たり前になっていますが、もう少しそれをクローズアップしてもいいのではないかと思います。

再三のように話しが出ていますが、過度の自粛というのが目につきます。それを良い方向に導いて行くという、報道としての使命があると思います。こういう危機の時こそ各放送局の真価が問われるときだと思えます。その時こそ、「めんこいテレビの立場としてはこうだ」という主張を明確に出してもいいと思います。「さすがだ」という位のメリハリを利かせても良かった。いろんな事が、見えなかったものがこういう時に見えてくる。これが危機の時だろうと思いました。さまざまな事を考えさせられたのが、このほどの災害の報道だったと思えました。

○中村委員長

ACのCMのことがありましたが、確かに最初の数日間は2～3日はしょうがないという思いがしました。やはりかなり気になりました。普通のCMで抑制的なもので、お見舞いの

言葉、スーパーを入れるなどもう少し工夫しても良かったのではないかな。そういう余裕もなかったと言われればそうなのかもしれません。最近は少し普通のCMが復活してきましたけど、今だに続いているというのはちょっとどうかなと。私の6ヶ月になる孫が喜ぶような挨拶のCMは、まだ出てきます。あれが出てくるとチャンネルを回すと言う人がいましたけど。

私は大学にいた時に地震にあいました。すぐに自家発電がつかまりましたので、私の目の前にある受像機を2～3台全部つけて、以来ザッピングで見っていました。めんこいテレビは、特別これだというのは思いつかない。お話をいただいて、こういうテーマでやると聞いて、一生懸命探したのですが、私が見られる時間帯にはあまりなくて、ちょっと前に「山・海・漬」の時間に一回やられましたか？ あれを見ていたんですけどメモを取らないで見たので、何をやってたのかあまり記憶にありません。

今回ほどテレビ映像、テレビ報道の凄さというものを感じたことは、テレビ放送が始まってからいろいろと見てきましたが、なかったのではないのでしょうか。地震だけだったらこんなに大きな被害にはなっていなかった。津波が100年とか、もっと長いそれ以来の話しだということもありますけれど、その津波の凄さ、怖さをまざまざと映像で見せてくれたというのが第一印象でした。本当のテレビカメラマンが撮ったものだと思いますが、宮古の映像で、津波が堤防を越えてくる、車、船が越えてくる、橋にぶつかって来るというあの凄さから始まって、実はどこの局で何を流したかよく覚えていませんが、家が流れて行く、大きな家が流れて行くという映像、それを見ている人が「助けて」とか声を出す。そういう状況というのは初めてで、凄い、怖い状況を見ました。これは是非、その後に撮った映像も交えて今後、記録としてしっかりと残していただきたい。後に生きる人のための記録として残していただきたい。基本的には低い所に住むということは、日本の場合は、特に三陸沿岸では危険であることはかなりはっきりしているので、今後の復興の中、街づくりの中でどうあるべきかということをもっと明白に提言していると思います。そういうことを頭に置きながら整理していただけると大変にいい記録になると感じました。

報道については、キャスターとか、コメンテーター、解説者、レポーターを含めて、これらは各局さまざまです。先ほどいろんな所から系列局の応援をいただいているという話もありました。各局の力量というものがいろんな形で見えた感じがしました。その中でめんこいテレは大変健闘されていたと思います。中には心無いレポーターもいました。まだ4日も経っていないんですが「もう4日も経ったのにまだガレキの山です」と言ったような、そんなコメントを軽々しく言うような若い女子アナもいました。コメンテーター、キャスターなど

も実際に現地に入って現場を見た方は、けっしてそんな事は言いません。スタジオから出ていない人は、聞いていると「あれ、こん畜生」と思えるようなことをわりと平気で言っています。現地を知らない発言に対して、どういう風にそういう人たちに知ってもらおうかということがあります。その辺は今後、教育の問題もあると思いますが、何かをしてほしいという気がします。解説者の中にも現地を知らないで勝手な事を言っているという人がたくさんいました。そういう人は評価して二度と出さないようにして欲しい。最近いろんな人が平気でコメンテーター、解説者として出てきます、老いも若きも。かなりいろんな経験のある人だとなるほどと思って聞かせてもらうけれど、そうでもない人が時々変な事を言います。その辺はよく人選をしていただきたいと感じました。

特に原発報道の時に感じたのは、物事をプラス思考で考えるか、マイナス思考で考えるかによって発言が全然違います。確かにマイナス思考で注意を喚起するというのは大事なのですが、そうするとやたら不安感だけを煽ることになります。今こういう状況にマイナスの事を言い出すとキリがなく今にも全部、放射能でやられてしまうのではという感じすら抱かせて、あのような買いあさりになってしまっています。これは今、必死になってやっけて今、食い止めつつあるわけです。ただ時間がかかっているだけです。プラス思考で、もう少し解説していただくと、不安感を煽らないですむのではないかと感じがしています。

僕はアナウンスとナレーションが違うということを前から感じていました。アナウンサーが淡々と事実を報道する、原稿を読むというのは抑制的でいいのですが、ナレーションになると感情移入が入ってきます。そうすると過度に批判的なニュアンスになったり、過度に不安感を煽ったりする印象が伝わってくるのです。アナウンサーでない方がそういう風なことを読む時には、先般の和田解説委員のお話にもあったように、特にニュースショーのような時には気をつけていただきたい。今回の場合、原発問題に関して、これは非常に大変な問題なのですが、いたずらに不安感を煽らないような仕方をしていかないと、かえって大きな問題になってしまいます。必要以上の被害が現実には農家の方たちに起きています。その辺はマスコミの立場としては、これから少しこれをひとつの教訓としてやっていただければありがたいと思いました。

特に放射能については一生懸命、放射能と放射線の説明までしていただきましたけど、やはり日本人は被爆国にあるにも関わらず知らな過ぎる。そういう事に対する理科教育がちゃんとできていないことを図らずも露呈しました。もちろん、大変な問題ですけど、放射線というのはいろんな機会に浴びています。ある程度の、このレベルなら大丈夫だという知識を

もっている必要がある。テレビ局に関わる方でもほとんど知らない。いたずらに知らない。知らないから根掘り葉掘り聞いて「それで大丈夫？それで大丈夫？」になってしまい、益々、不安感を煽っていくようなところがあったので、私は大変気になりました。

最近、私がテレビを見て嬉しい、一番感動しているのは、復興に向けて、あれだけの状況になりながら前向きにこの土地で頑張っていこうという被災者の人たちがかなりいることです。それを見せていただいたことが大変嬉しく思いました。ローカル局だからこそ各地のそういうことが把握できて取材ができる。私も久慈から陸前高田まで現地を3日間ほどかけて見てきました。その場所、場所によって現地の人たちの復興に掛ける思いが違いました。そういうことを是非きめ細かく捉えていただいて、今後、復興に向けて希望、明るい展望を見せてくれるような番組作りを是非していただきたいと思いました。そういう被災をした人たちの前向きでありながら自己抑制的、あまり自分ばかりではなく周りのことを思いながら被災生活を送っている方々に比べて、都会にいる人たちの買いあさりといった自己中心的な感じがあり、その対比が見ていて面白かったので、いつかローカル局としてそういうものを取り上げていただきたい。我々東北人の思いと信条との対比として、都会にいる人たちの、いつの間にか自己中心的になっている状況を啓発するような番組ができれば面白いと思いました。

いずれにしても今回、大変な状況の中で素晴らしい番組をほとんど徹夜に近い状態で送っていただいた事に心から感謝したいと思います。今は緊張状態であり興奮状態なんですね。現地の方も「頑張る、頑張る、やるやる」と言っています。もう暫くしていろんな方々、中央から来た人たちが居なくなっていく、自分たちだけになっていく。場合によっては集団の状態から自分たちの家族だけで住むようになってくる。或いは家族もなくて一人で住むという状態になった時に喪失感とか、絶望感が襲ってくるのではないかと心配しております。そういう状態をどうやって乗り越えさせるかというところにも、もう少し報道番組が関わって、そういう人たちに希望を与えるような番組作りをしていただければいいなと思っています。私としての要望を申し上げて私の話しを終わらせていただきます。他に何か質問があればどうぞ。

○吉田委員

ACのCMは、どのようなことで放送されているのでしょうか？

○佐藤社長

めんこいテレビが決めて放送しているわけではなく、震災にあたってスポンサー側から通常のCMは流さないで、ACに差し替えて欲しいという指示があって放送しているものです。したがって、契約上の問題もあって、めんこいテレビが勝手に変更するわけにはいきません。ACをお断りすることは、売上と関係するので局として悩ましいという事情があります。

素材はもっといろいろな種類があるのですが、難民救済というようなものもあって、この状況で流せるCMが、あれだけしかなかったということがあります。CMの最後に「AC」というサウンドロゴがあったのですが、うるさいというクレームがあって、音を消す作業をしています。

また、このように長期間に亘ってこれほどたくさんのACが放送されることは想定していなかったもので、急遽、復興を応援するような新しいCMが作られたことは皆さんもご存知だと思います。

いろいろな対応をしてはいるのですが、あまりに流す本数が多すぎて、うるさいというクレームをたくさんいただくこととなっています。通常のCMを流すスポンサーが増えてくれることを願っています。

○中村委員長

ACのコマーシャルについて番組で解説したものがありません。最初は政府が金を出したのではというような投書もあったとか。そうではないよとか。あれはいろいろなところで、かなり苦労して作っていいやつを選んでいるんだとか。

○佐藤社長

ACが毎年社会的なテーマを決めて広告会社を対象に公募し、コンペで勝ったCMの企画が、ACの予算で制作されているものです。ACに選ばれることは、広告会社にとって大変名誉なこととなっています。

○中村委員長

ありがとうございます。

はい、八木橋委員どうぞ。

○八木橋委員

石巻は夜中に火事になっているのを映してくれたからまだ分かりました。「高田は全滅ですとか、大槌は役場が流されました」と言うんだけど、なかなか映像が出てこないから、どの程度というのがわかりませんでした。やはり、あそこは行くのが大変だったんですか？

○薄衣局長

現地に行く道路に規制がかかっている、行けるような状態ではありませんでした。そこまで辿り着くまでに時間がかかってしまいました。もちろんこれだけ応援に来てもらっていますし、各地に行つて取材したいのですが、なかなかそこまで足が伸ばせる状況ではなかったのが実態です。

○中村委員長

委員の皆様、他にはございますか？ないようですので、続いて欠席委員の方からのレポートを事務局からお願いします。

○事務局

東海林委員のレポートです。

インターネットのツイッターやフェイスブックによる書き込みによる情報は、「いや待てよ、これはデマかも」と思える余裕はありますが、テレビや新聞からの情報は確かなものとして受け取ってしまいます。ニュース映像の印象から3月27日の時点で電気が復旧したかのように思っていた釜石市も、実際行つて見ると電気が点くのは病院と避難所となっている学校だけでした。町はガスもなくロウソクの生活でした。そのような中、女性用の下着を友人に届けに行きました。盛岡にいる多くの知人が「電気がまだだった」というこの事実にはビックリしていました。

報道の方々は深夜でも何かあれば出かけて行き、家族の安否よりも現場を優先せざるを得ない状況である事はよく知っています。また、津波にのまれていく人、車、ご遺体など実際、オンエアできない映像を多く撮ってしまったのではないかと心を痛めております。しかし、自宅にいながら現場に立ち合うことができ被害の深刻さを実感できるのはテレビの映像によることが大きいのも事実です。現地を訪れた時、重油の混じった泥や腐ったような魚の匂い、

雪の冷たさ、暗くよどんだ空気、それらが一体となって体に押し掛かってきました。五感で感じる状況をいかに視覚聴覚だけで視聴者に伝えるか、現場のどこを切り取るか、被災者の声に耳を傾けた報道をお願いします。これは東京から来るディレクターにはできないことです。東京の人に向けた被災地はこんなにひどい、というメッセージではなく、岩手で共有する情報がほしいのです。キー局は普通の番組編成に戻ってきていますが、地域ごとの細かい情報が欲しい私たちに変わりはありません。これこそが地元ローカル局に求められる事だと思います。

教え子が若い命を落としています。悔しいです。同じ岩手にいて何ができるのか。現地での細かな情報を見ながら刻々と変化する支援に求められるものを判断しています。1 ヶ月が過ぎた今、これからが腕の見せ所だと思います。

○中村委員長

それでは、以上で本日の議事はこれで終了とさせていただきます。
ありがとうございました。

○事務局

中村委員長、ありがとうございました。

今回の審議会の模様は4月23日（土）朝4時30分から「めんこいテレビ批評」として放送いたします。

次回は5月10日の正午より、こちらの会場での開催となりますので、よろしくお願い致します。

それではこれで番組審議会を閉会とさせていただきます。

7. 審議機関の答申又は改善意見に対してとった措置

特になし

8. 審議機関の答申意見概要を公表した場合におけるその公表内容、方法及び年月日

* 平成23年4月13日（水） 産経新聞 東北版

番組審議会
岩手めんこいテレビ
岩手めんこいテレビの第
201回番組審議会（中村
慶久委員長）が12日開か
れ、東日本大震災の一連の
報道について審議した。
委員からは「視聴者の目
線に立った報道はよかつ

た」と評価する半面、「A
C（公共広告機構）のCM
が多すぎた」という批判、
「今後は希望が持てる番組
を作ってほしい」などの要
望が出された。

* 平成23年4月23日（土）午前4時30分から4時45分まで「めんこいテレビ批評」内で放送

* 据え置き書類を作成し、本社受付に置き一般の人々が自由に閲覧できるようにした

9. その他の参考事項

特になし